心肺蘇生法に神様は必要か？

「しゅーん、準備できたー？」

「あー……もうちょっと待ってくれ。すぐ行くから」

　玄関から急かすようなヘルメスの声に、瞬は慌ててそう返事をした。これから行くところには、一体何を持っていけば良いのか分からず、荷物を纏めるのに時間がかかっていたのだ。

　瞬はこれから、ヘルメスと一緒にポセイドンを助けに行く。色々と不都合なこともあるので、ヘルメスの計画を聞いた日から週末まで待っていたのだが、ヘルメスは一刻も早くポセイドンを探しに行きたかったようだった。

　まあ、それも当然か。

　瞬は、ようやく纏まった荷物を持って、自分の部屋を出ながら、そう思う。ヘルメスにとって、どうやらポセイドンは大切な姉のような存在らしく、それは先程瞬を急かしたヘルメスの言葉からも伝わってきた。

　しかし、瞬はヘルメスが、そのポセイドンという神様を何故、姉のように慕っているのかは知らない。聞こうと思ったのだが、ヘルメスは計画を詰めるのに忙しそうにしていて、そのチャンスが無かったのだ。

　出来れば、そこら辺の話は、目的地までの道中で聞いておきたい。瞬は、そう思っていた。

　これから瞬たちが行くのは、一言で説明すれば『洞窟』である。勿論、ただの洞窟ではない。

　ヘルメスも妖精モドキも碌に説明していないので、瞬はその洞窟がどのような場所であるのかは知らなかった。だが、洞窟自体は日本列島の中心に近い位置にある。要は、日本の中で、海からもっとも離れたところに、ポセイドンはいるらしい。

　何故そんなことが分かるのか。瞬は不思議に思い、ヘルメスに聞いてみたところ、彼女は次のように答えてくれた。

「ポセイドンは海の神様だからね。そりゃ、海に近いところの方が力も高まるし。私が幽閉するなら、まず海から離れたところに置いておくよ」

　それを聞いて、瞬も八割がた納得することが出来た。残りの二割はといえば、海から離れたところに幽閉しておきたいなら、別に日本国内でなくても良いのでは、と思ったことがその半分。もう半分は、ポセイドンもヘルメスのように、ガデスクリスタルに閉じ込めて、誰かが持ち歩いているのではないか、ということである。

　それについてヘルメスに尋ねたら、ヘルメスはうーんと唸ってから、首を横に振った。

「私が救出されちゃったことで、向こうもある程度慎重にはなったと思うんだよね。多分、全員を持ち歩かせたりはしないと思うよ。ポセイドンお姉ちゃんは、力の増減が分かりやすい部類の能力だから、万が一も起こりづらいし」

「ああ、そういうことね」

　無理に持ち歩かせて奪われましたってことになるよりは、一部だけどこかに隠しておこうってことか。確かに、全部のクリスタルを誰かに持たせておくのは、ちょっと不安かもしれない。俺でも、最低一つは目の届くところに保管しておきたくなる。

　あ、でも、クリスタルが何かの弾みで壊れてしまって、中の神様が復活したら、タンタロスからすれば困ることになるわけだから……なるほど。この世界のどこかに隠しておこうって結論になるのね。

　あれ？　でも、クリスタルを隠しておくのであれば、それこそこの世界ではなくても、他の世界に隠しておく方が安全なんじゃ……？

　そう思ったものの、それにも何か理由があるのだろうと思い、瞬はその時は何も聞かなかった。それよりももっと、聞いておきたい話があったからだ。

「なあ、ヘルメス。お前はポセイドンのことを、姉のように慕っていたみたいだけど、どうしてそんなに仲がいいんだ？」

　瞬自身、友達がほとんどいないので、そこら辺の感覚は分からない。だが少なくとも、友達に兄貴がいたとしても、そいつと仲良くなれるイメージは全然湧かなかった。一つ歳が違えば、流行っているものや、価値観はガラリと変わる。

　まあ最も、神様と人間ではそこら辺も違うのかもしれないが。

「うーん……どうしてだろう？　神様のいろはを教えてもらっていたから、その関係で自然と仲良くなったってとこかな？　あ、ほら。学校で言うと、先輩と後輩の関係に近いかも」

「ヘルメスは、ポセイドンから色々と教えてもらっていたのか……。でも、使える力って全然違うんじゃないか？　海の力と商売繁盛の力じゃ、どう考えても接点が無いんだが……」

「あー。別に、その力を使いこなすだけでいいわけじゃないからね。他にもやらなきゃいけないこと、出来なきゃいけないことはあるよ。私は、それをポセイドンお姉ちゃんから教えてもらっていたの」